

# 低学年生への

1 研究の目的を伝える なぜ職業研究、学部・学科研究に取り組むのか、それは3年間の進路研究の中でどんな位置づけとなるのかを生徒に理解させる。研究の意義を理解させることで、生徒の主体的活動が実現する。

2 自己理解をさせる 職業研究、学部・学科研究はともに、生徒が自分自身を理解することから始まる。生徒が自身の興味・関心を突き詰め、自らの生き方を考えていくような教師の問いかけが求められる。

3 生徒の視野を広げる 進路研究では、生徒の進路選択の幅を広げることが重要になる。職業、学部・学科に対する視野を広げるため、どんなツールでどんなふうに調べればよいかを、具体的に生徒に提示する。

4 職業を実感させる 机上の研究で得られた知識を深化させるため、職業講演会や職場訪問など、職業の実態に触れられる場を設定。単なる見学にとどまらないように、生徒の主体的活動に留意した事前準備を行う。

進路選択の根幹となる低学年次の職業研究、学部・学科研究、指導のねらい、実施のためのノウハウを完全詳説！

# 7つの仕掛け

5 学問を実感させる 大学の雰囲気に触れ、早期に進路選択への意欲を高めるためにオープンキャンパスへ参加させる。また、学部系統別に教授を招いての講演会で、大学の研究活動に対する生徒の興味を喚起する。

6 研究を深化させる 職業、学部・学科研究の成果を生徒にまとめさせ、クラス単位などで発表させる。他者の研究の視点、成果を知ることと視野を広げ、さらに職業、学部・学科について考えていく素地を作る。

7 志望校に結びつける それまでの研究の成果から、今後の進路選択の道筋をイメージさせる。志望校選択に向けて、どんな大学が自分にふさわしいのか、それに向けてどんな努力が必要かを、具体的に考えさせる。

## 職業研究、学部・学科研究の目的を生徒に伝える

なぜ、どのように考えるのかを伝えていく

進路選択は高校から大学・短大、そして社会へと続いていく中で、自分はどういう風に生きていくのかを考えていく作業である。また、意欲的に学習に取り組むためには、学習の動機づけとなる目標を自ら見つけることが大切になり、その意味で学習指導と進路指導

は車の両輪に例えられる。このように、将来を見据えた進路選択は高校3年間の活動の中でも重要なものと位置づけられ、そのスタートとなるのが職業研究、学部・学科研究であることを低学年のうちから生徒に訴えたい。一口に進路選択といっても、それがどんな取り組みを示すのかを生徒は簡単に理解できず、ややもすると「受験したい大学を決めること」を進路選択と取り違えてしまつ。生徒に対して、学年集会やHRなど

の場で、進路選択とは「将来どんな職業に就きたいか そのためにはどんな学問を学ぶべきか それはどんな大学で学べるか」あるいは「大学でどんな学問を学んでみたいか それを学んでどんな職業に就きたいか それはどんな大学で学べるか」といった流れで考えるものだということを繰り返し説明し、理解させたい。生徒が、3年間をかけて就きたい職業、学びたい学問、進むべき大学を探しながら、人生についてイメージできるようにすることが

求められる。だが、進路選択の重要性を生徒に訴えるとき、観念的、抽象的な話に終始しないように注意したい。そこで卒業生の体験談（職業研究、学部・学科研究をきちんと志望校を選んだ成功談、あるいは失敗談）や研究成果などを提示する。そうすれば、高校生活の中で職業研究、学部・学科研究をどのように行っていくのか、そしてその成果はどのようなものなのかを、具体的に理解できるはずだ。

## 身近な興味から生徒の自己理解を促す

日常の興味や関心から進路の方向性を探る

職業研究、学部・学科研究は、「こんな仕事をしたい」「こんな学問を学びたい」という目標を見つけるための作業である。その目標に結びつく自己の志

向を探っていくのが、進路選択のための基礎めとなる自己理解だ。

そこで生徒に、自分自身の興味・関心の方向性を具体的に探らせる取り組みを行っていく。例えば、LHRの時間などを使い、自分の興味・関心のあることを書き出させる。生徒の中には「日本の現代小説」に関心がある、「建築の仕事に興味がある」と具体的な職業

生徒に提示する進路研究の流れ(案)

1年次	<p><b>自己理解</b> 自分の興味・関心はどのようなものに向いているのか、どのような人生を送りたいのかを考える。自分らしい生き方を浮かび上がらせることで、職業研究、学部・学科研究への基礎を固める。</p> <p><b>職業研究</b> 将来就きたい職業について考える。世の中にはさまざまな職業があるが、どのような職種にどんな職種に興味があるのか、その職種に就くためにはどんな勉強をし、どんな資格をとる必要があるのか、またその職種に就くのに有利な資格はなにかなどを、具体的に研究する。そのうえで最も自分にふさわしい進路を見極め、文理選択の指針とする。</p>
2年次	<p><b>学部・学科研究</b> 志望する学部・学科について調べる。その学部・学科ではどんな研究ができるのか、卒業後の進路にはどのようなものがあるのか、どんな大学にあるのかなどを研究する。同じ名前の学部・学科でも大学によって学ぶ内容に違いがあることなども調べる。</p> <p><b>志望校研究</b> 学部・学科研究の結果を踏まえて、志望校を絞り込んでいく。それぞれの志望校の所在地、研究内容、学費、卒業後の進路、入試の内容などを調べる。</p>
3年次	<p><b>受験校決定</b> それまでの進路研究の結果と自分の学力を踏まえて、受験校について考えていく。</p>

や学問に結びつくテーマを書く者もいるはずだ。しかし一方で、「なんとなく自然に興味がある」と漠然としか自分の志向を把握できていない者もいる。そついつた生徒には「海、山、植物、動物、魚の中でどれが一番興味があるのか」「自然に実際に触れるのと、それに関する本を読むのとではどちらが楽しいか」など、興味・関心の中身をできるだけ突き詰めてみるように問いかけていきたい。

ここで重要なことは、あまり性急に興味・関心を絞り込ませないこと。生徒の興味・関心の幅を広げてやることも大切だ。そこで、なぜそのテーマに関心があるのかを考えさせ、そのテーマについて図書館などの資料を使ってより深く調べ、発表させるような場を設けるのもよいだろう。調べる過程の中で関連するほかのテーマに目が向き、またクラスメートの発表を聞くことで、それまで知らなかった分野に関心を持

**自己理解を促す指導事例**  
未来の自分を書かせる 熊本県立K高校  
1年生に「自分の20代、30代」と10年区切りで人生のプランを自由に書かせる。自分が将来こんなことをしたいかを書かせ、そこから現在の自分を見いださせる。そして、志望する職業の内容とつづればなるかなど具体的な職業研究へと発展させる。

らその職業に就けるのか、そのためにはどんな勉強が必要か、どの学部・学科を選べばいいのか、といった進路の道筋を調べさせることが重要だ。これが生徒の目標になれば、ひいては学習に対する動機づけにもつながる。

学部・学科研究は、文理選択や志望校選択に結びつけるための指導として位置づけられることが多い。だが、明確な方向性が定まっていない生徒には文系と理系両方の学問研究など、複数の学問(学部・学科)を調べさせ、視野を広げる場となる。また、複数の学部・学科の比較研究は、既に明確な目

つきっかけにもなる。クラスという集団を利用して、多様な価値観を生徒が共有できるようしむけたい。  
また、適性検査を活用して自己を客観視させる方法もある。だが、これは

## 3 職業、学部・学科を幅広くとらえさせる

### 研究方法を提示して生徒主体の活動を促す

職業研究、学部・学科研究はとも、「ある程度の時間をかけて生徒自身に調べさせ、考えさせる活動である。研究の流れ(なにを使って、どう調べ、まとめるか)はLHRの時間などを使って、生徒に提示する必要があるが、活動そのものを時間割の中ですべて終わらせるのはやはり難しい。研究の指針を与えたら、あとは放課後や長期休暇の課題として生徒に個人、またはグループ単位での自主的な活動を促すよう

あくまで自分探しのきつかけの一つととらえ、検査結果を絶対視しないことが必要。むしろ、検査結果を基にレポートを書かせたり、面談を行うなど、事後の指導が重要である。

にしたい。

そのために、研究を進めるための材料は具体的に提示する。職業研究では『職業まるわかり事典』など、職業の内容を紹介している情報誌が、また学問についても『学べる大学探せる事典』などの進路情報誌、大学のシラバス(講義要項)やホームページなどが挙げられる。シラバスなどの各大学独自の資料は大学に直接請求して入手することになるが、その際、生徒の学部・学科研究のために使いたいという旨を伝えれば比較的入手しやすいようだ。  
ただ、机上の研究だけではやはり表面的な理解しかできない。長期休暇を利用して、関心のある仕事に就いてい

標を持つている生徒にとつても、自分の志望を再確認するきっかけにもなる。  
学部・学科研究の項目は、学ぶ内容、学問の将来性、学んだことをどう社会で生かせるのか、学問内容が隣接する学部・学科にはどんなものがあるかなど。いずれも自分の興味・関心がどのように満たされるかを念頭に置いて調べ、レポートなどにまとめさせる。  
なお、学部・学科研究の場合は、同じ学部系統を志望する生徒をグループにして研究させれば、生徒同士が学び合い、効率的で重層的な研究ができるだろう。

## 4 職業の実態に触れさせ、実社会を体感させる

### 「働くこと」を「働くこと」を「実感させる」

生徒を職業の実態に触れさせる取り組みとして、まず職業講演会の実施が挙げられる。生徒が関心を持ちそつな

職業に就いて活躍している社会人に講演を依頼する。

職業講演会の目的は個別の職業に関する理解を深めることだけではない。働くことの意味、やりがいの大切さ、目を向け、職業について考えることの重要性に気づかせることにある。それだけに、まずは多くの生徒が関心を持

って話を聞くことができる職種から講師を選ぶのがいいだろう。最近では国際社会で活躍する仕事、福祉の分野に携わる仕事、情報に関する仕事などが生徒の関心を集めているといわれ、これらの職業とかかわりの深い学部・学科も年々増えてきている。このような分野の企業や官公庁などに依頼し、講師を派遣してもらうのもよいだろう。  
講演会の実施にあたって最も注意したいのは、講師にどのようなスタンスで話してもらうかという点だ。職業研究の目的から考えると、特定の企業の代表として仕事の内容を細かに話してもらうよりも、1人の社会人として仕事のやりがいなどをとつ考えているかを話してもらう方がよいだろう。だが、あまりに観念的な話では生徒の関心は長続きしないし、せつかくの講演会なのだから、リアルな仕事の様子も生徒に聞かせたい。講演内容の方向性は事前に講師と相談しておきたい。

### 実際に職場を訪問して生徒に働く姿を見せる

社会人の働く姿を実際に見るといって、職場訪問は生徒の進路観の養成

る人にインタビューしたり、関心のある学部・学科で学ぶ大学生の話を聞く機会も作らせた。また、保護者に自分の職業紹介や職業についての考えなどを執筆してもらい、それを冊子にまとめれば立派な職業研究の資料となる。この取り組みでは、保護者を巻き込むことにより、家庭でも職業や進路について話し合つきっかけが生まれ、進路研究がスムーズに進むという副次的効果も期待できる。

### さまざまな切り口で研究させ視野を広げる

実際に職業研究、学部・学科研究を始める前に、どのような意識で活動に取り組むのかをLHRなどで生徒に伝える。  
職業研究では、就きたい職業を絞り込んでしまつことが目的ではない。あくまで関心のある職業を調べてみるといふ気軽な気持ちで臨ませたい。目標が見えない生徒や関心が多方面に渡る生徒には、複数の職業を調べさせるのもよい。  
調べる項目は仕事の内容、将来性、待遇、適性などだけでなく、どうした

に大きな効果が期待できる取り組みの一つだ。  
訪問先は、生徒の関心に添つて、できるだけ多くの職種を設定したい。同窓会、保護者や教師の知人などを頼つて探するのが一般的だ。地元の企業や役所なども、訪問の意図を説明すれば意外とスムーズに承諾してもらえることもある。だが、日程や参加人数などを理由に断られることは少なくない。そのため何件も依頼の電話をかけることになるので、1人の教師だけで訪問先を探るのは難しい。依頼文書などは共有しながら、学年回の教師で分担して行いたい。

企業などへの訪問依頼は教師が行つ場合が多いが、生徒自身が依頼文書を

**職業を実感させる指導事例**  
さまざまな職業講演会を実施 静岡県立H高校  
1年次では、クラス単位で地元企業の社会人の懇談会、企業のトップによる講演会を実施(1、2年合同)。そして2年次には、保護者の代表が各クラスの教壇に立ち、高校生に望むこと、社会で必要とされる人材について語る。

特集

### 低学年生への7つの仕掛け

7つの仕掛け



書き、電話をかけることも可能。こうすれば、職業についての理解を深められるだけでなく、生徒が主体的に活動するというメリットも得られる。だがいきなり生徒に電話をさせては訪問先も戸惑いかねないし、生徒に任せきりにするのはやはり不安だという場合は事前に教師が訪問先に対して生徒から依頼の電話がある旨を伝えておき、担当窓口を生徒に教える方法もある。

生徒にアポイントをとらせる場合には、電話のかけ方や文書の書き方などの指導が必要になる。市販の本などを参考に、生徒向けのマニュアルを作ることができる。また、学校から電話をかけさせれば、いざというときに教師がフォローすることも可能だ。

## 単なる見学に終わらない活動を盛り込む

せっかく訪問をしても、そこで生徒になにをさせるかが明確に決まっていないと、職場訪問の効果は半減してしまつ。小学校などの社会科見学では業務内容の一方的な説明を受け、見学用に設けられたコースを回るだけで終わることが多い。だが、高校生の職場訪

問では、生徒が主体的に活動に参加できるようにしたいものだ。

そこで、事前に訪問先に対して、なにか少しでも生徒が体験できる仕事を用意してもらえないかどうかを聞いてみるとよい。ただし、あまり多数で訪問するとオフィス内を見学することさえ難しくなり、生徒ができる仕事を準備してもらつのも困難になる。生徒が実際に体験できる職場訪問とするためにも、できるだけ小人数のグループで一つの訪問先に行けるように計画を立てたい。

訪問先でなにをするのか、できるだけ細かいタイムスケジュールを決めておくことも必要だろう。例えば昼を挟んで実施する場合は、昼食をどうするかなども含め、学校側の希望をいくつか挙げながら訪問先と相談しておきたい。訪問先もこのような取り組みに不慣れだと対応に苦慮するし、学校側にとつても無理なスケジュールにならないからだ。

## 事前学習で訪問先への理解を深める

訪問先が決まったら、生徒にアンケ

ートで希望をとって訪問先に振り分ける。訪問先によっては参加する生徒の人数が限られていることもあるので、アンケートでは第2、第3希望ぐらいまで書かせるようにしておきたい。また、訪問先の名前の一覧だけで訪問先を決めさせると、生徒は興味本位で選びがちだ。それぞれの訪問先の見どころを簡単にまとめたものをアンケートの際に配るなど、できる限り生徒にアピールする必要がある。

生徒の訪問先が決まったら、訪問先についての事前学習を行わせる。訪問先の業務内容はどんなものか、質問したいこと、この訪問を通してどんなことを学びたいか、などについてまとめさせる。事前学習に使用する訪問先についての資料は、大学の資料などとは異なり高校には置いていない場合が多い。訪問先から

事前に会社案内などを入手したり、インターネットで検索するなど、調べ方を生徒に示す必要がある。  
当日の訪問先への交通手段は、多人数で同

### 職場訪問の依頼文書のポイント

職場訪問の受け入れ先を見つけるにあたっては、電話で担当窓口（多くの場合は広報担当や総務担当）に簡単に口頭で依頼内容を説明するとともに、正式な依頼文書の送付が必要になる。企業によっては、高校生の職場訪問に不慣れなところもあるので、次のような順序でその意図と希望する体験の内容をできるだけ正確に伝えるといいようだ。

### 取り組みの意図、目的を伝える

今、高校では生徒に対して将来を見おした進路指導が行われていること、その一方で生徒の職業観、社会観が希薄なため、実際の仕事現場に身を置いて、生徒が現実の社会の姿に触れることができる取り組みが求められていることを、訪問依頼先に理解してもらおう。

### 職場訪問の形態を説明する

いつ、何年生を、何人くらい訪問させたいか、教師の引率の有無、当日希望する訪問内容などを説明する。

### 訪問当日までの準備を確認する

職場訪問を有意義なものにすると同時に、受け入れ側の不安を解消するためには、訪問先との事前の打ち合わせが重要になる。訪問に先立って、高校側との打ち合わせをどのように行つか、生徒の事前学習のために訪問先からどのような資料を送付してもらいたいかなどを伝える。

# 学部・学科の実態に触れさせる

## 生徒自身の目で

## 大学の姿を確かめさせる

大学の学部・学科で行われている研究内容の実態に触れる比較的手軽な方法として、オープンキャンパスがある。オープンキャンパスというと3年生が対象というイメージがあるが、進路意欲を高めるために、低学年生にも参加を勧めたい。

国公立大の場合、オープンキャンパスへの参加は学校単位での申し込みとしてるところもある。志望者の多い地元国公立大などのオープンキャンパスについては、学年で担当する教師を決め、早い段階で生徒に参加希望の調査を行い、とりまとめしておくというふう。

オープンキャンパスの内容は大学によってさまざまだが、各学部・学科が

ら代表の教授が研究内容を講義形式で解説したり、大学生が毎日の勉強の様子などを話したり、大学内の施設を案内してくれるところが多い。大学側にとってはPR的な目的も大きいため、オープンキャンパスの印象だけで志望校を決定するのは早計だが、具体的な目標を持って学習に取り組めるようになる点で効果的な行事だろう。

## 大学教授による高校生のための模擬講義

最近では、学部系統ごとに大学の教授を招き、学問の内容について講演してもらつ、「出張講義」を開催する高校も増えてきた。

講師の選定にあたっては、志望者の多い学部系統を優先させながら、できるだけ多くの学問分野から講師を選ぶ

ことが望まれる。また、心理学のように志望する生徒が多いがその内容を正しく理解している者が少ないと思われる学問は外せない。

高校を卒業した大学生に大学の実態について話をしてもらうという方法もある。この場合、年齢が近いため生徒が話を聞きやすいということ、またその学問をめざしたきつかけや大学選択の方法など、高校時代の経験に即した話が聞けるというメリットがある。教育実習のために来た大学生に講師役を依頼し、同じ学部を志望する高校生の質問に答えてもらうのも比較的簡単な方法だ。

## 生徒の希望に合ったテーマの講師を選ぶ

大学教授に講演をしてもらう場合、どの教授に依頼するかを決めるのはなかなか難しい。大学は志望者が多い地域の大学などから選べばよいが、教授個人の情報となかなか手に入らず、決め手が見つからない。さらに同じ学部・学科でも教授によって研究テーマが異なるため、できるだけ高校生にもイメージしやすく、その学部・学

じ訪問先に行く場合はバスをチャーターした方がよいだろう。生徒だけで現地に集合する場合は、事前に訪問先への行き方、集合場所などの確認を確実にしよう。迷ったりした場合などの連絡先を明確にしておくことが求められる。事前学習で調べた結果や質問事項を、冊子などにまとめて当日携帯するのなら、その中に連絡先などを明記しておくこと安心だ。

訪問先の数が多い場合は、教師が同行できない場合もある。しかし、生徒に主体的な行動を促すためには、むしろ教師が同行しない方がよい面もある。教師が同行する場合も、生徒の中から代表者を決めておき、その生徒を中心にできる限り生徒主導を進めるようにしたい。

科の全体像を感じ取れるような研究テーマの教授を見つけてなければならぬ。シラバスなどで教授の研究テーマなどがある程度調べたうえで依頼することが大切だ。

講師への依頼は、大学の広報課などを通して行うのが一般的だ。しかし、直接教授の研究室に依頼するのも一つの方法。インターネットや電子メール上の有料データベースに著名人や学術関係者の情報を検索できるものがあるが、ここで自宅や研究室の連絡先がわかることも多い。

講師が決まったら、どのようなテーマでなにを話してもらいたいかが、確実に高校側の意向を伝えておく。講演会の目的を説明し、生徒がどのような関心を持っているかを伝える必要がある。生徒から事前に質問などを挙げさせ、それを踏まえて話をしてもらうのもよい。

いずれにしても、図表などの資料を使ったり、実験を取り入れるなど、生徒が関心を抱きやすい内容になるよう、

特集

## 低学年生への

## 7つの仕掛け

講師に工夫をお願いしておきたい。ただ、高校生を対象にした講演会は大学生を相手にした講義とは異なり、大学教授にも得手不得手があることは事実である。できれば、他校で同様の取り組みを行っている高校があればその様子を聞いて、ふさわしい教授を探していきたい。

## 一方通行にならないような事前準備を

講演会に先立って、講師のプロフィールや研究の概要、講演のテーマなどをまとめて生徒に配付する。複数の講師がいる場合は、生徒はそれに基づいての話を聞きたいかを考え、また講師への質問事項などを考えておくことができる。

講演内容に関する打ち合わせは念入りに行いたい。特に大学教授は自分の研究テーマについて、非常に専門的な話をする傾向が強いため、意図を伝え、話してもらう内容を検討してもらうことが大切だ。例えば、ゼミに所属する学生は卒論でどんな研究をするのか、どういつに研究を進めていくのかなど、高校生が少しでも具体的に大学

での研究内容をイメージできるような話を盛り込んでもらう。

さらに、卒業後にどんな活躍の場があるのかなどを話してもらえば、生徒は学問を社会と結びつけて考えることができる。また、事前に生徒に行ったアンケートから抜き出した質問項目を

講師に渡しておき、講師にそれについての答えを交えながら話してもらえば、生徒はより興味を持って聞くことができるはずだ。

講演は講師の一方的な話になりがちなので、講演の最後に質疑応答の時間を設けるなどして、生徒が主体的に参

加し、学問、学部・学科に対する疑問を解消できる場面も作りたい。だが、生徒はなかなか大勢の前で発言することができない。そこで講演会のあと、別の教室に移動し、質問のある生徒が自由に出入りできる場を設けるなどするとよい。

国立大のオープンキャンパス実施例(11年度)

大学名	キャンパス名	開催日時(実施学部)	事前予約	問い合わせ先
弘前大	文京町キャンパス	8/18 13:00~16:00 (人文・農学生命科)	要	学務部入試課入学試験係 0172-39-3122(直)
	本町キャンパス	8/19 13:00~16:00 (教育・理工)	要	
東北大	青葉山キャンパス	8/18 13:00~16:00 (医)	要	(理)022-217-6350 (薬)022-217-6803 (工)022-217-5818
	川内キャンパス 記念講堂	7/29, 7/30 10:00~ (理・薬・工)	不要	学務部入試課 入学試験第一掛 022-217-4859(直)
宇都宮大	峰キャンパス	7/29, 30 実施予定 (全学部)	不要	(理)022-217-6350 (薬)022-217-6803 (工)022-217-5818
	陽東キャンパス	8/10 10:00~15:40 (国際・教育・農)	要	学生部入試課入学試験係 028-649-5112
筑波大		8/10 10:00~15:00 (工)	要	学務部学務第二課 入学試験第一係 0298-53-6007(直)
		7/21 10:00~16:30 (第二学群・医学専門学群・体育専門学群)	要	
名古屋工大	御器所キャンパス	7/22 10:00~16:30 (第一学群・第三学群・芸術専門学群)	要	入試課 052-735-5083
		7/30 10:00~17:00 (工)	要	
大阪大	豊中・吹田キャンパス	8月中旬に実施予定		学生部入試課 入学試験第二掛 06-6879-7098
大阪教育大	柏原キャンパス	7/20 12:00~17:00	要	入試課入学試験係 0729-78-3324(直)
	天王寺キャンパス	10/31 12:00~16:00	未定	
神戸大	六甲台・楠・名谷キャンパス	7月下旬~8月上旬に実施予定		入試課 078-803-5230(直)
岡山大	津島・鹿田キャンパス	8/5, 6 時間未定	不要	学務部入試課 086-251-7192
広島大	東広島・霞・東千田キャンパス	8/2, 3 13:00~16:00	不要	学生部入試課 0824-24-6173(直)
山口大	吉田・医学部・工学部キャンパス	7/22 10:00~15:00	要	学生部入試課入学試験係 0839-33-5168(直)
九州大	箱崎・病院・六本松・筑紫キャンパス	7/22 10:00~16:00 (文・教育・法・経済)	要	学務部入試課 092-642-2265(直)
		7/23 10:00~16:00 (理・医・歯・薬・工・農)	要	
熊本大	黒髪・本荘・九品寺大江キャンパス	8/6 時間未定		学生部入試課入学試験係 096-342-2146(直)

大学説明会、入試説明会などの名称で実施するところも含まれています。5月中旬時点に入手した情報の一部を掲載しています。

## 研究成果を共有させ、 個々の進路観を深化させる

### 発表の場を設け 生徒同士で 刺激し合う

職業講演会や職場訪問、学部・学科講演会の終了後、生徒に講演や訪問の感想、講演を聞いて新たに気づいた点、自分の進路に対する考え方で変わった点などを書かせる。ただ取り組みに参加して終わりにするのではなく、自分の進路を考える材料として受けとめ、今後の進路選択の材料とするために、こつこつた振り返りの場は重要になる。

職業研究、学部・学科研究などの成果として生徒がまとめたレポートを、グループごと、クラスごとにまとめて冊子にするのもよいだろう。研究の成果を共有できるだけでなく、クラスメイトの考えに刺激を受け、クラス全体で進路について真剣に考える雰囲気が生まれることも期待できる。さらに研究の成果を発表する場を設けてはどうか

だろう。発表会では、単にレポートを読むだけでなく、写真や模造紙に研究の結果をまとめたものを使用するなど工夫させるとよい。これにより生徒はいつそう熱心に研究に取り組みようになり、さらに自分の考えをまとめて他者にわかりやすく説明するという自己表現の訓練の場にもなる。

このような発表会を行う場合、ある程度は生徒に自由に取り組ませるようにする。教師はあくまでアドバイザー的なスタンスをとり、生徒の自由な発想での表現を尊重したい。

なお、職業研究は、学部・学科研究に比べて生徒の関心は多岐に渡っていることが多いため、研究は自ずと個人単位のものになりがちだ。しかし、グループを進めると研究に対して最初はあまり熱心でなかった生徒も、ほかの生徒の取り組みに刺激されて、次第に積極的に研究を進めていくようになるという効果もある。グループでの活動を効果的に取り入れてはどうか

## 研究成果を具体的な進路に 結びつけて考えさせる

### 生徒の志向を 大学選択につなぐ 方法を提示

前述までの取り組みを通して、職業や学部・学科に対する自分の志向を生徒は把握することができたはずだ。これを、最終的な進路に結びつけるためには、わかったことを整理し、絞っていく必要がある。そして、学びたい学問、就きたい職業を見極め、そのためにはどの大学、学部・学科に行けばよいのかを具体的に考えていく。

生徒の中には、大学といっても地元、の国公立大や大都市の有名私立大しか知らないという生徒もいるだろう。進路指導室などの資料を使って、少しでも大学に対する視野を広げさせたい。そして、同じ学部・学科の名称でも、大学が違えば研究内容や卒業後の進路が違ってくることもあるという大学研究のポイントを提示する。

これらを踏まえて、より自分の目標志向にあった大学、学部・学科群が見えてきたら、入試日程や入試科目、難易度の見方、大学、学部による授業料の違いなど、志望校選択に関するチェックポイントを具体的に提示する。そして、志望する大学、学部・学科に入学するため、自分の学習状況を分析し、これからの学習計画を立てていくことを生徒に求めていく。

これらの過程において、さまざまな理由で自分の志望を変更する生徒は少なくないはずだ。それだけに、生徒が職業研究、学部・学科研究の結果を踏まえながら、少しでもよりよい選択ができるように、生徒の志向を深く理解した支援が求められる。

特集

### 低学年生への

### 7つの仕掛け